

モノクロームメゾチント体験教室

ミュージゼ浜口陽三・ヤマサコレクションでは、
モノクロームメゾチント技法を体験できる教室を
不定期で年に4～6回開催しています。
1回の実習で製版から刷りまでを行ない、
ポストカードサイズの作品を完成させます。
初めての方でも無理なく参加いただける、
初心者向けの教室です。



次回開催日と、申込方法

2017年秋は4回開催します。

教室の内容はすべて同じです。

技法はモノクロームメゾチントに限ります。詳細はお問合せください。

※休館中の開催となりますが、作品はご覧いただけます。(展示作品未定)

※お申込み後、開催直前のキャンセルはご遠慮ください。

講師：江本創(アーティスト)

日時：10月27日(金)①10:30～13:30 ②15:00～18:00

10月29日(日)③10:30～13:30 ④15:00～18:00

参加費：入館料+1,800円(材料費込み)

定員：各回12名

持ち物：下絵(サイズ12×7.5cm)、汚れても良い服装またはエプロン

9月20日(水)12:00から電話にて受付開始。(定員になり次第終了)

ミュージゼ浜口陽三・ヤマサコレクション TEL:03-3665-0251

27日①、29日③は満員となりました。

メゾチント体験教室Q&A

Q1. メゾチントってどんな技法？

A1. 銅版画の技法のひとつ。

ビロードのような画面が特徴です。

銅の板に施した凹部分にインクをつめ、凸部分の余分なインクはふき取って強い圧力で紙に刷るのが主な銅版画のしくみです。メゾチント技法では、最初に版全面に細かな傷(まくれ)をつけ、ビロードのような黒い画面をつくります。これを「目立て」といいます。(当館の体験教室ではあらかじめ目立て加工のしてある銅版を使用します)明るく(白く)したい所は「スクレーパー」という道具でまくれを削りとり、インクが溜まる量を減らします。ぎざぎざのまくれがなだらかになるほど明るく(白く)なり、微妙な削り加減で美しいグラデーションの表現が可能です。えんぴつで黒くぬりつぶした画面に消しゴムで絵を描くようなイメージです。

下絵サイズ:12×7.5cm(縦横どちらでも可)

Q2. どんな下絵を用意したらいいの？

A2. 浜口陽三の作品を参考に見てみましょう。

左上:「猫」1937年

ドライポイント技法による作品。(今回の教室ではこの技法は使いません)銅の板に先のとがった針のような道具で引っ掻き、その傷にインクを詰めてから余分なインクをふき取り、紙に刷りあげます。引っかいた所が黒くなるので、「線」で描くのに向いた技法です。

左下:「巻貝」1959年

メゾチント技法による作品。(今回の教室で使う技法です)

暗い背景から白い巻貝が浮かびあがります。

よくみると、線ではなく黒の「濃淡」で描かれています。

貝のまるみを帯びた形、影、背景のグラデーションは、メゾチントの得意とする表現です。どちらかというと「線」で描く表現には向きません。

